

概要

生徒 A は非社会的で、交流学級の生徒と関わろうとしていなかった。また、QU アンケートの結果から、自己有用感が低く、限られた人間関係の中で生活している様子が分かった。そのため、生徒 A は社会の中で人と関わり、認められた経験が少ないため、**自己有用感**が育まれておらず、よって、**社会性**を獲得できていないのではないかと考え、他者と関わるよさを味わわせることを目指した。

具体的な方策として、**積極的に活動させるための手立て**を用意した結果、生徒 A が自分から活動に取り組む姿や、交流学級の生徒と関わろうとする姿が生まれた。また、**関わり合う中で自己有用感を育む**ことができる場を設定した結果、生徒 A が年長者としての自信を付けたり、交流学級の一員として役立ちたいと願ったりする姿が生まれた。QU の結果も大きく改善し、12 月に行った QU では、生徒 A の**自己有用感**や**他者と積極的に関わろうとする態度**が育まれていることが分かった。本論文は、その実践を生徒の姿を通して検証したものである。

I 主題設定の理由

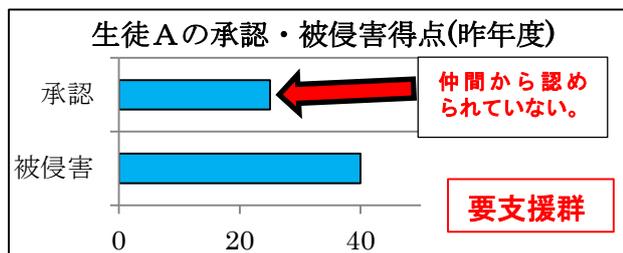
1 生徒の実態より

昨年度、生徒 A は非社会的で、欠席や遅刻がとでも多く、「会いたくない」と言って交流学級と関わろうとしなかった。また、「無理。ぼくはできない。」と自己否定することがあった。

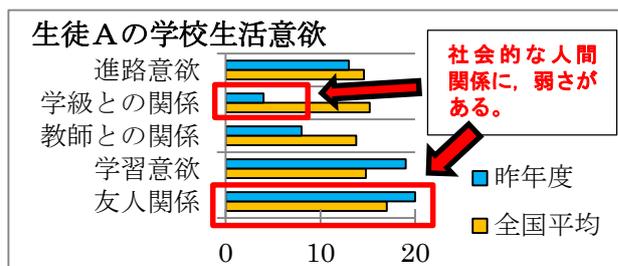
アンケートからも、生徒 A が学校生活に困り感を持っていることが分かった。生徒 A は、昨年度の QU で承認感が低く、自己有用感が育まれていない様子であった(図表 1)。また、「友人関係」に比べて「学級との関係」が極端に低く、**限られた人間関係の中で生活している様子**であった(図表 2)。

このような様子と結果から、生徒 A は社会の中で人と関わり、認められた経験が少ないため、自己有用感が育まれておらず、よって、社会性を獲得できていないのではないかと考えた。そして、社会性を育むためには、人と関わるよさを味わわせ、その中で認められる経験をし、自己有用感を高めていくことが必要ではないかと考えた。

※QU 各指標の得点の見方は資料編 P1, 2 参照



(図表 1 : 昨年度 QU における承認・被害得点) 1



(図表 2 : 昨年度 QU における学校生活意欲)

2 多治見市の教育事業より

多治見市では、「たじみ教育生き生きプラン」の中で、教育環境づくりとしてインクルーシブ教育を推進している。特別支援学級の生徒が交流学級の生徒と同じ学びの場に参加できることを目指すことは、市の教育事業とも一致している。

以上のことを踏まえ、研究主題を次のように設定した。

他者と関わるよさを味わうことのできる子の育成
～積極的に関わり合う中で自己有用感を高めるための手立てを通して～

II 願う生徒の姿

- (1) 仲間と積極的に関わる子
- (2) 関わり合う中で自己有用感を高められる子

III 研究仮説

言語活動の工夫や達成目標の視覚化などの、生徒が積極的に活動できるようにするための手立てを用意し、同時に異年齢集団での活動や行事を通じた交流学級の生徒との活動などの、人と関わり合う活動の中で自己有用感を育むことで、生徒Aの社会性を育むことができるのではないか。

きを得ているが、それが無自覚のままであったり、整理されていないままであったりする。だから、工夫することが難しい。

そこで、気づきを整理し分類する活動を通して、無自覚だった気づきを自覚化することをねらった。また、たくさんの気づきの中でも、特に大切にしたいことを選び出すことによって、気づきがさらに焦点化され、質的に高められると考えた。

IV 研究内容と具体的方途

1 研究内容 ※具体的な研究構図は資料編 P3 参照

	実践1「いづみ学級交流会」(異年齢交流)	実践2「文化発表会(合唱祭)」(交流学級との交流)
研究内容1 積極的に活動させるための手立て	(1)関わる喜びを獲得するための工夫 (2)気づきを自覚できる言語活動の工夫	(3)取り組みの成果を視覚化するための工夫
研究内容2 関わり合う中で自己有用感を育む	(1)関わる喜びを自信の獲得へとつなげる手立て	(2)交流学級の仲間とつながるためのリーダー会の設定 (3)願いを具現化できる作業学習の設定
実践別の成果と課題	研究内容1—(1)(2) 研究内容2—(1)	研究内容1—(3) 研究内容2—(2)(3)
全体の成果と課題	研究内容1—(1)(2)(3) 研究内容2—(1)(2)(3)	

(図表3：研究構想図)

2 具体的方途

研究内容1 積極的に活動させるための手立て

(1) 関わる喜びを獲得するための工夫

生徒Aが積極的に取り組めるようにするには、活動そのものを楽しみと感ぜられることが大切である。そこで、無理なく活動に参加し、楽しむことをねらい、内容は平易なものから始め、子どもの変化に応じて高めていこうと考えた。

また、交流会で行う活動は、生徒Aが「やりたい」と思うものでなければ、積極的に取り組むことはできないと考えた。そこで、生徒Aが自分で遊びを調べ、実際にやってみてから、活動内容を決定し、生徒Aが「やりたい」と感ぜられるようにしようと考えた。

(2) 気づきを自覚できる言語活動の工夫

生徒Aは、活動に取り組む中でたくさんの気づ

(3) 取り組みの成果を視覚化するための工夫

文化発表会の取り組みが始まるのに合わせ、生徒Aと私とで、交流学級の朝・帰りの合唱練習に参加することを決めた。

これまで練習に参加していなかった生徒Aにとって、毎日合唱練習に参加するのは難しいと予想できた。そこで、生徒Aが取り組みを継続できることをねらい、一週間ごとにめあてを区切り、段階的な達成目標を立てた。また、生徒Aが自分の取り組みの様子を理解できるようにするため、取り組みの成果や自分の成長を視覚的に分かりやすいものにしようと考えた。

研究内容2 関わり合う中で、自己有用感を育む

(1) 関わる喜びを自信の獲得へとつなげる手立て

一般に、生徒に自信を付けるには、他の生徒からの肯定的評価が必要であると言われている。そのため、生徒Aに「関わり合う喜び」を育み、自信を付けることをねらい、活動の後には振り返りを行ったり、下級生からのお礼の言葉をもらったりした。

(2) 交流学級の仲間とつながるためのリーダー会の設定

生徒Aの自己有用感を高めるには、交流学級の生徒からの肯定的評価が必要であった。そのため、同じ三年生である交流学級の生徒から声をかけられたり、認められたりする場を仕組み、生徒Aの自己有用感を高めていきたいと考えた。

文化発表会は、生徒Aが交流学級の生徒と関わ

る必然性がある行事である。そこで、生徒Aの自己有用感を育むことをねらい、「どうすれば生徒Aが交流学級の生徒とうまく関わることができるか」を交流学級のリーダーと話し合った。

(3) 願いを具現化できる作業学習の設定

文化発表会后、生徒Aは「今度は自分が交流学級のために役立ちたい」との願いを持った。そこで、爪楊枝アートで交流学級へのメッセージボードを作り、交流学級へ届けることにした。

爪楊枝アートを作るだけでも達成感を持つことはできる。しかし、生徒Aの自己有用感を育むためには「他者から肯定的に評価された」との経験が重要である。そのため、他者からの肯定的評価として、完成後に交流学級の生徒から感謝や賞賛の気持ちの言葉のこもった手紙を届けてもらった。

V 実践

実践 1

特別支援学級

「いずみ学級 交流会」 (異年齢交流) 7月実施



生徒の社会性を育むには、「異年齢集団による交流活動」が重要であることが分かっている。他の子と一緒に遊ぶことを通して、「人と関わることで楽しい」と感じるところから「人との関わり」は始まる。それが、社会性の基礎になるのだと言われている。また、この活動の特徴には、「遊び」を目的とした集団であったこと、「活動自体が楽しみ」であり、誰かに命令された「仕事ではなかった」点がある。異なる年齢の子が交流する中で、年長者が役割を自覚し、遂行することで、年長者に自信が付いていったのである。

一方で、特別支援学級の特徴の一つに、日常的に異年齢による交流活動が行われていることがある。本校では、知的学級に2年生(2名)、3年生(1名)、自閉情緒学級に1年生(2名)が在籍している。生徒Aは年長者である3年生であり、特別支援学級ならではの異年齢集団による交流活動を通して、生徒Aに「人と関わりたい」との思いや「年長者

としての自信」を育ませることができると考え、知的学級の2、3年生の生徒が企画し、自閉情緒学級の1年生も参加する、交流会の場を設定した。

研究内容 1 積極的に活動させるための手立て

(1) 関わる喜びを獲得するための工夫

① : 子どもの変化に応じた活動内容の工夫

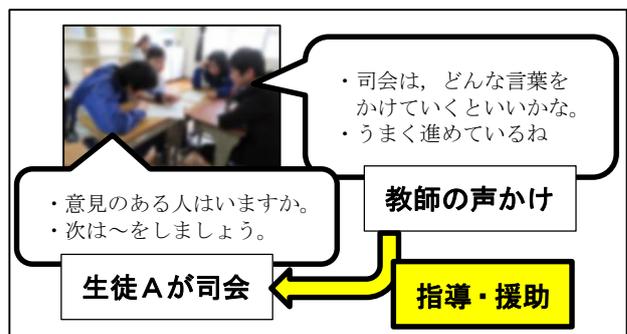
7月の交流会に向け、4月から月に1回程度、知的学級と自閉情緒学級とで交流活動を行い、子どもの変化に応じて内容を高めていった(図表4)。4月の時点では、生徒Aに十分な力が付いていない。そのため、4月の歓迎会は、教師が企画・運営をし、「年少者のお世話をし、楽しませる」との年長者の役割を担った。そして、生徒Aは1年生と一緒に遊びを楽しむことを目標とした。その後、5月の交流活動では「1年生にあたたかい言葉をかけ、協力できるようにする」、6月の交流活動では「他校の生徒と協力できるように、小泉中の生徒をまとめる」と、段階的にめあてを難しくしていった。

段階的に難易度を高めた活動内容のめあて

易	4月：歓迎会、校区探検…1年生と <u>一緒に遊ぼう</u>
	5月：スポーツ交流会練習…1年生に <u>あたたかい言葉をかけよう</u>
	6月：市内スポーツ交流会… <u>チーム小泉をまとめよう</u>
難	7月：いずみ交流会… <u>交流会を企画・運営しよう</u>

(図表4：活動内容とめあて)

また、普段の授業の中で話し合いの場を設け、生徒Aに司会進行を任せながら、教師も話し合いに参加し、「話し合いの仕方」を指導した(図表5)。



(図表5：話し合いの指導)

これらの結果、7月の交流会では生徒Aが無理なく遊びの企画や当日の司会をすることができた。

② : 自分たちが楽しめる活動内容の工夫

自分たちが楽しめる遊びを選ぶために、図書室で生徒が自分で遊びを調べ、「これをやってみたい」と思う遊びを自分で提案した。実際に提案のあった遊びは、以下の通りである。

実際にやってみた遊び（太字は採用したもの）

グランドゴルフ、ソフトバレー、宝探し、**教室間違探し**、ペットボトルボーリング、ピンポン球サッカー、折り紙、新聞チャンバラ、**人間すごろく**

(資料編 P4「実際にやってみた遊びの様子」参照)

これらの遊びを、生活単元学習の時間に一通り自分たちでやってみて、それぞれ感想を交流し、交流会当日の遊びを決めた。

生徒Aは、自分が遊びで遊んでみて、納得したものを当日の遊びとして採用している。自分たちでやってみて楽しかった活動を選んでいるので、交流会当日も同様に楽しめることを期待できた。

(2) 気づきを自覚できる言語活動の工夫

生徒からたくさん気づきが出るようにするため、まずは候補となる遊びで実際に遊んでみて、活動後に振り返りを行った。ここでは、「人間すごろく」を例に述べる。

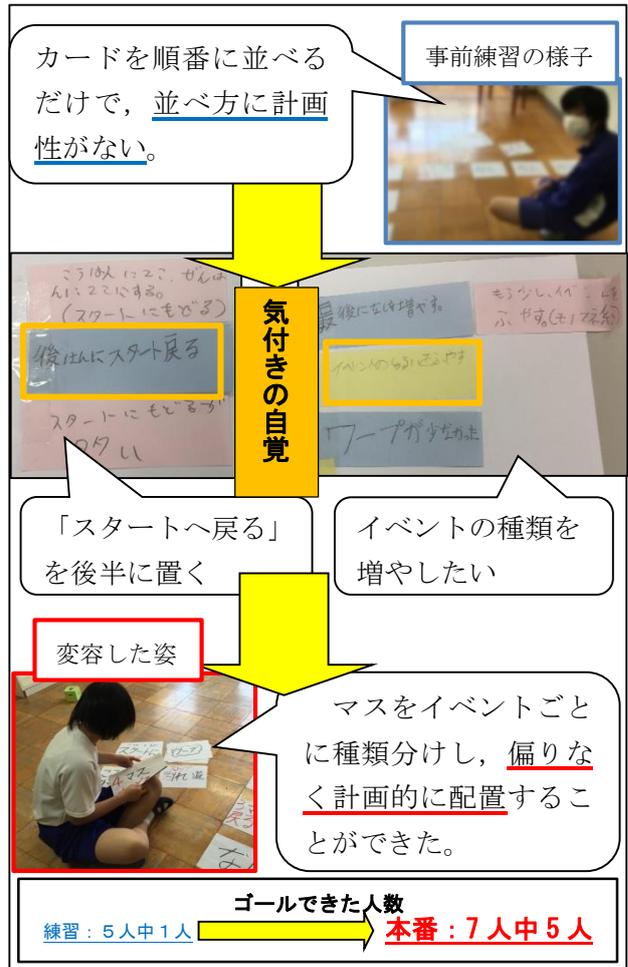
「人間すごろく」とは、教室に紙で書いたマスを並べ、参加者がすごろくのコマとなって遊ぶ遊びである。1回目に人間すごろくで遊んだ際、生徒は思いっくままにマスを作り、それを順に並べていた。その結果、「スタートへ戻る」がいくつも連続して並んだり、内容に偏りがあったりして、1人しかゴールすることができなかった。

振り返りでは、気づきを付せんに書いてマッピングした(図表 6)。生徒Aは自分が前半にスタートに戻ってばかりで、後半まで進めなかった経験から、「後半にスタートへ戻る(を置いた方がいい)」と書いた。また、他の生徒との交流で「イベントの種類を増やした方がいい」という点に多くの意見があったことから、「“スタートへ戻る”を前半と後半におき、その代わりに前半に別の(“ワープ”などの、スタートに戻らない)イベントを増やす」という工夫をすることを、みんなで決めた。



(図表 6 : マッピングの様子)

1回目のすごろくで、生徒Aは何度やってもスタートに戻ってしまっていたが、腹を立ててしまうだけで、工夫のポイントだと気が付かなかった。それが、付せんに書いてマッピングすることで、工夫の気づきであると自覚することができた。また、生徒Aが書いた付せんは少なかったが、他の生徒の言葉から工夫できる点に気づき、交流会ではバランスよくカードを並べることができた。その結果、練習時は5人中1人しか時間内にゴールできなかったが、交流会では7人中5人がゴールできた(図表 7)。



(図表 7 : 気づきを自覚できる言語活動の工夫)

研究内容2 関わり合う中で、自己有用感を育む

(1) 関わる喜びを自信の獲得へとつなげる手立て

生徒 A に自信を付けるには、めあてに向かって取り組む中で「うまくできた。自分にもすごい所があるな。」と成長を実感させる必要がある。そこで、生徒 A と話し合い、年長者として「1年生にあたたかい言葉がけを行い、楽しく過ごせるようにする」とのめあてを設定した。

また、自己有用感他者との関わりの中で育まれるものであるため、生徒 A が自分の役割を自覚して一生懸命行動したことが「年少者のお手本になった、役に立った」と感じ取れる経験が必要だと考えた。そこで、自閉情緒学級の担任と連携し、活動後には、年少者の生徒が「楽しかった」や「ありがとう」の気持ちを手紙にまとめ、年長者に届ける場を設定した(図表 8)。

年少者が手紙を書く際には、自閉情緒学級の担任から「生徒 A 先輩は、どんな言葉をかけてくれただろうか」と問いかけてもらい、お礼の手紙に書く内容と生徒 A のめあてが関連付けられるようにした。生徒 A が受け取った手紙には、以下のような内容が書いてあった。

- ・はげましの言葉をかけてくれてありがとう。
- ・「大丈夫」「こっちだよ」と優しく接してくれて嬉しかったよ。

(資料編 P6「年少者からのお礼の手紙」参照)

交流会後の振り返りでは、お礼の手紙を受け、生徒 A は以下の発言をした。自分の役割を自覚し、一生懸命行動したことで、自信を付けたことがわかる。

- ・ あったか言葉を使えた。
- ・ 三年生としての仕事(司会)ができた。
- ・ まだ三年生らしくない姿もあるから、次はもっと頑張りたい。

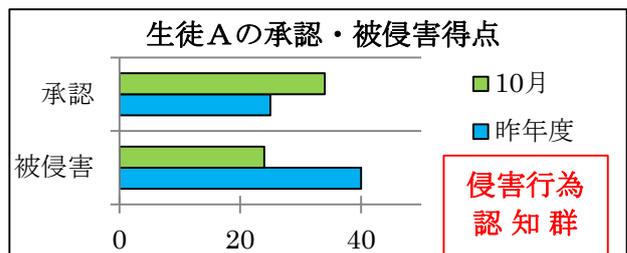
(資料編 P7「生徒 A の振り返り(交流会)」参照)

これらの実践の結果、10月の QU では、承認得点が上昇し、被侵害得点が減少しており、生徒 A の自己有用感が高まっていることが分かった(図

表 9)。生徒 A が上級生として他の生徒から認められ、自信を付けた結果、QU の結果が改善したと考えられる。



(図表 8: 関わる喜びを自信の獲得へとつなげる手立て)



(図表 9: 10月 QUにおける承認・被侵害得点)

実践別の成果と課題(実践 1)

研究内容 1-(1) 関わる喜びを獲得するための工夫

- 生徒の変化に応じて内容を高めていくことで、生徒 A が無理なく活動に取り組むことができた。
- 自分たちが楽しいと思った活動を自分たちで選んでいるので、生徒が人と関わる喜びを獲得できることが期待できた。
- 特別支援学級の中では、年長者として自信をもって活動できたが、交流学級ではまだ自信をもって活動することができていない。

研究内容 1 - (2) 気づきを自覚できる言語活動の工夫

○気づきを付せんに書いてマッピングすることで、生徒 A が気づきを自覚することができた。

●これからも気づきを自覚する経験を積めるよう、他の学習でもマッピングを実践する。

研究内容 2 - (1) 関わり合う中で、自己有用感を育む

○年少者からの感謝の手紙を通して、生徒 A が自己有用感を持ち、年長者としての自信を付けた。

○QU における生徒 A の承認得点が向上し、被侵害得点が減少した。

●QU における生徒 A の学校生活意欲はまだ不十分である。

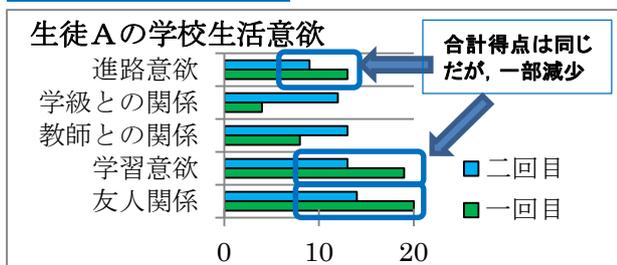
実践 2

特別支援学級・交流学級 「文化発表会（合唱祭）」 11 月実施



実践 1 の結果、生徒 A は異年齢集団による交流活動に取り組む中で、年長者として自信をもって活動に取り組むことができた。また、他者から認められているとの意識が高まり、社会性の基盤となる「人と関わりたい」という態度を育むことができた。

しかし、10 月の QU における学校生活意欲に関しては「学級との関係」は大きく改善しているものの、全体としては意欲に変化がなく、生徒 A の「意欲を持って学校生活を送ろうとする態度」は十分に育まれていないことが分かった (図表 10)。



(図表 10 : 10 月における学校生活意欲)

QU の結果をもとに、生徒 A と二者懇談をしたところ、「特別支援学級の中では、活躍ができています」と感じている一方で、「交流学級で嫌なことがある

わけではない。しかし、交流学級ではあまりしゃべれないし、進路も大きく違うから、友人とも距離を感じる」「交流学級の子と比べてうまくできないことが多い。だから、一生懸命取り組もうという気持ちが起きない」と話した。

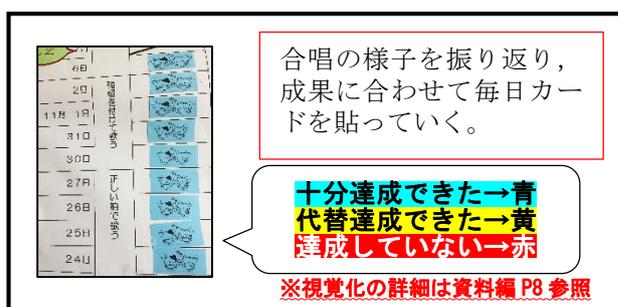
このことから、1. 進路を目前に控える中で、交流学級の生徒との違いを意識するようになった 2. 特別支援学級の中で活躍できたからこそ、交流学級では同じように活躍できない現状に不満を感じているのではないかと考えた。

そのため、生徒 A の自己有用感を育み、仲間と関わろうとする意欲を高めるためには、「交流学級でもうまくできた」という経験を増やし、生徒 A に自信を付けることが必要と考えた。

研究内容 1 積極的に活動させるための手立て

(3) 取り組みの成果を視覚化するための工夫

生徒 A と文化交流会のめあてについて話し合い、1 週間に 1 つずつ、5 週間で 5 つのめあてを決めた。めあての内容は、すぐにできることから始め、徐々に難易度を上げていった。また、めあては毎日振り返り、その日の達成具合によって青、黄、赤のカードを張り分けた (図表 11)。



(図表 11 : 視覚化の仕組み)

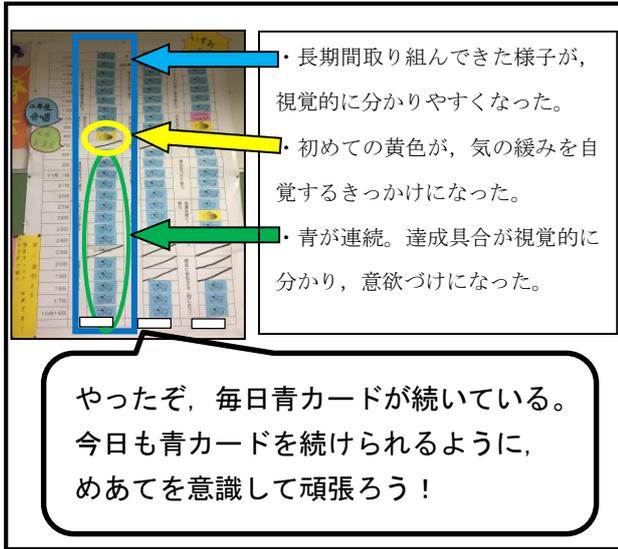
1 週目のめあてとして立てた「指揮者を見て歌う」ことは、生徒 A にとって取組前からすでにできている、取り組みやすい内容であった。そのため、一週目は簡単に青カードを続けることができた。その後取り組みの後半になり、より高いめあてとなっていくても、「今日めあては〇〇だから、頑張ろう」と話し、自分から合唱練習に参加することができた。

また、生徒 A は合唱へ参加する際に、「参加しな

研究内容2 関わり合う中で、自己有用感を育む

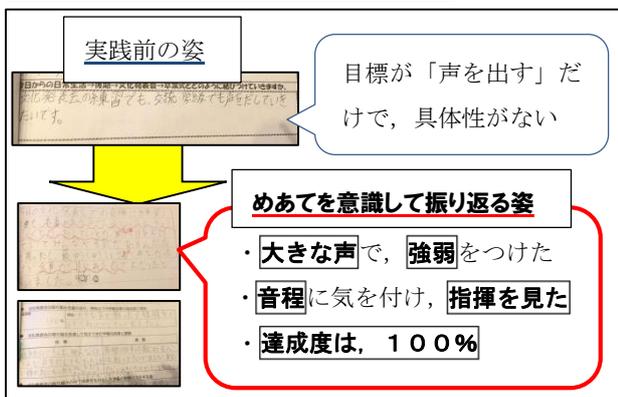
(2) 交流学級の仲間とつながるためのリーダー会の設定

いと赤が付いてしまう」と話したり、朝の合唱練習に間に合わず、初めて黄色が付いたときには、黄色が付いたことを悔しがり、翌日は一番に登校したりしていた(図表 12)。このような姿から、青カードをはることで、取り組みの成果を視覚化することができ、そのことが参加の意欲付けになることが分かった。



(図表 12 : 視覚化の効果)

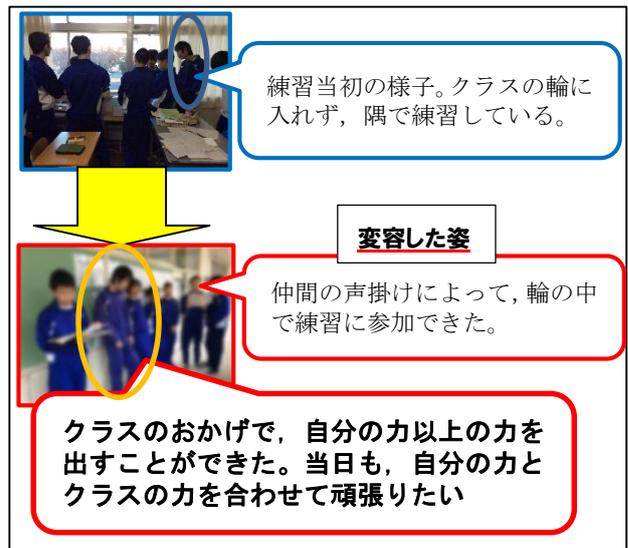
活動の評価は自己評価のみで行った。そのため、めあてが本当に達成できているとは限らない。しかし、取り組み前は「声を出したい」と漠然とした目標を立てていた生徒 A が、取組後の振り返りでは「大きな声」や「強弱」、「音程」といった、めあてに決めたキーワードをもとに、具体的に振り返ることができた。生徒 A がめあてを最後まで意識していたと考えられる(図表 13)。また、生徒 A は、取り組みの達成度について「100%できた」と自己評価した。このことから、取り組みの成果を実感していることが分かる。



(図表 13 : めあてを意識して振り返る姿)

生徒 A が交流学級の生徒とうまく関わることができるようにするため、交流学級のリーダーや生徒 A と仲のよい生徒を集め、昼休みに話し合いを行った。話し合いの中で、「生徒 A は、自分から練習の輪に入ることができていない」との意見が出たため、生徒 A が合唱練習に参加して教室に入った時には、リーダーや、生徒 A と仲のよい生徒を中心に「おはよう」「今日も頑張ろう」などの声をかけることや、練習の輪に入るよう働きかけていくことを確認した。また、合唱リーダーは生徒 A に気を遣い、「もっと声を出して」との呼びかけをしていなかった。その点について、生徒 A と仲のよい生徒から「自分だけ特別扱いをされているから、輪に入りにくいのではないか」との発言があった。そのため、「生徒 A を特別扱いしない。できていない時には、他の生徒と同じように声をかける」と、リーダーと確認した。

このような取り組みの結果、生徒 A が交流学級の生徒と同じように輪の中に入って練習に参加する姿が生まれた(図表 14)。さらに、文化発表会の前日には、生徒 A が「クラスのおかげで、自分の力以上の力を出すことができた。当日も、自分の力とクラスの力を合わせて頑張りたい」と話す姿があった。



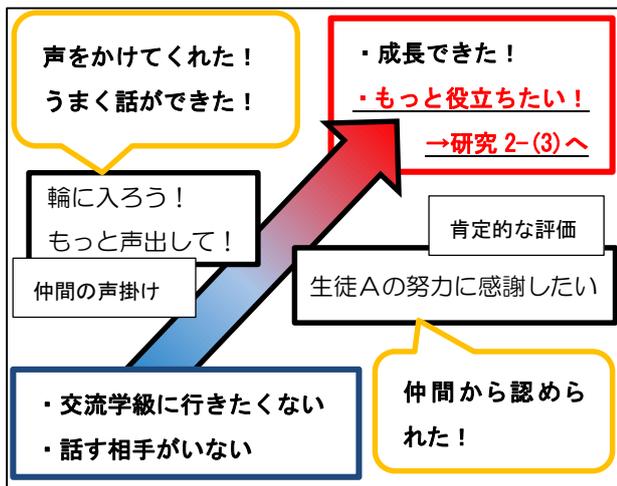
(図表 14 : 合唱練習の変容)

また、交流学級の生徒が、生徒 A について、文化発表会後の振り返り用紙に、以下の内容を書いたため、「あなたの努力に気付いている仲間がいるよ」と生徒 A に紹介した。生徒 A は「頑張ってよかったな」との感想を話していた。

文化発表会のために、毎日毎回クラスに来て練習していたので、一緒に発表ができ、嬉しかったし、生徒 A の努力に感謝しなければいけないと思いました。

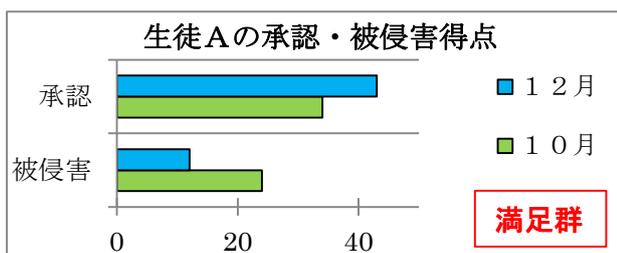
(資料編 P9「交流学級の生徒の振り返りの言葉」参照)

仲間からの声かけや肯定的評価を得て、生徒 A は「交流学級のおかげで成長することができた。今度は僕が交流学級のために何かできることで役立ちたい」との願いをもつようになった(図表 15, 資料編 P10「生徒 A の振り返り(文化発表会)」参照)。これは、「自分にもできるんだ」「仲間ともっと関わりたい」との意欲の高まりの表れだと考えられる。

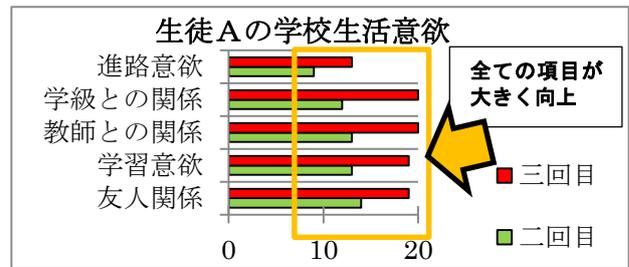


(図表 15 : 仲間と関わる中で、自己有用感を育む)

文化発表会後に行った 12 月の QU では、承認・被侵害得点がさらによくなっていた(図表 16)。また、10 月には伸び悩んでいた学校生活意欲も大きく向上していた(図表 17)。このことから、生徒 A の「自己有用感」や「他者と積極的関わろうとする態度」が育まれていることが分かる。



(図表 16 : 12 月 QU における承認・被侵害得点)



(図表 17 : 12 月 QU における学校生活意欲)

これまでの実践により、生徒 A の社会参加の意欲は十分高まっており、その結果として、「交流学級にもっと役立ちたい」との言葉が生まれたのだと考えた。そして、意欲が高まっている今だからこそ、「役立ちたい」との願いを叶えることで、生徒 A の自己有用感がさらに高まると考えた。そこで、研究内容 2-(3) を実践した。

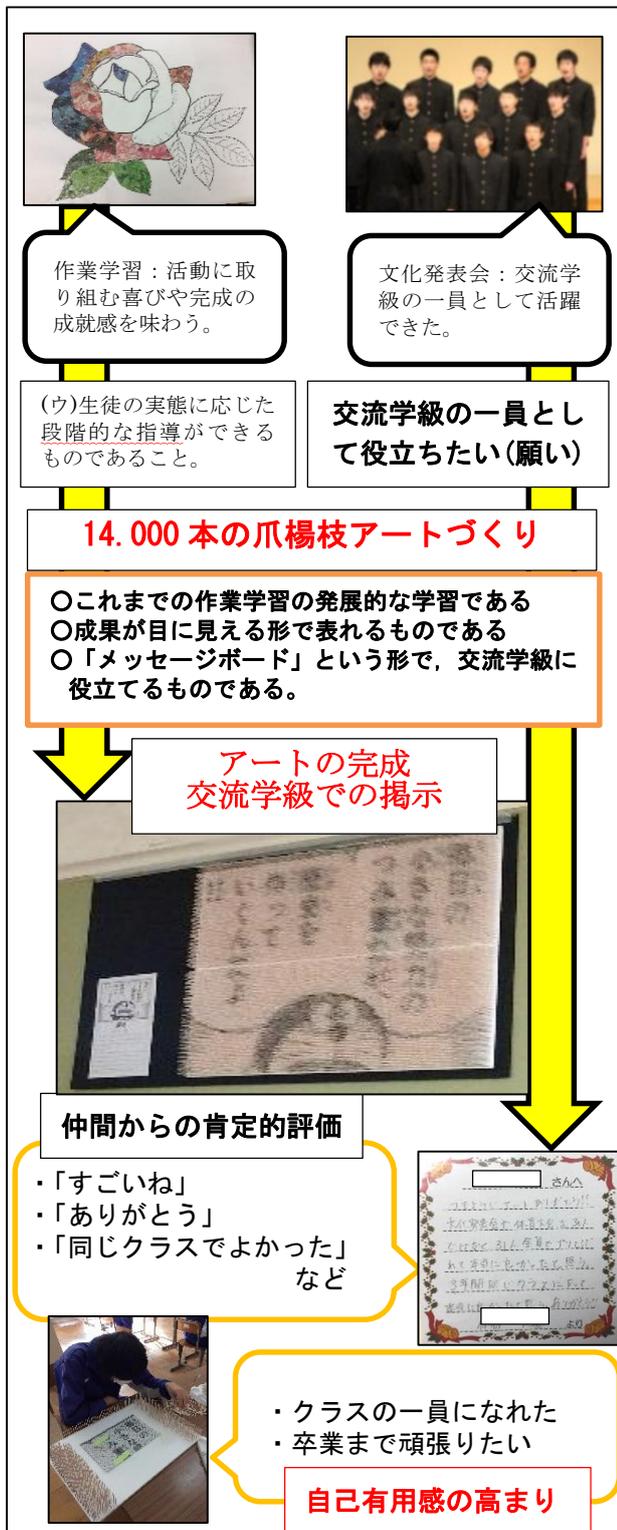
(3) 願いを具現化できる作業学習の設定

生徒 A は、役に立つための方法として、「形のあるものを作ることを願った。そのため、何らかの作品を作り、それを交流学級への感謝の思いとして届けることを、二人で決めた。また、具体的な方法を考えるに当たり、生徒 A がこれまでに取り組んできた学習から発展させることができないかと考えた。これまでの学習と関連づけることで、学習につながりが生まれ、今後さらなる発展を期待できるからである。

今年度の作業学習で、生徒 A は下絵に新聞紙を貼って色を付けるちぎり絵に取り組み、活動に取り組む喜びや完成の達成感を味わってきた。そのため、細かいパーツを組み合わせて一枚の大きな作品を作ることができると想定できた。しかし、これまでの作品の大きさは A3 程度で、より大きな作品を作る場合、生徒 A が色や全体図をイメージすることが難しいと想定できた。そのため、「細かいパーツから大きなものを作る」という性質は残しつつ、あらかじめ色やパーツを決めた上で、比較的簡単に拡大することができる「爪楊枝アート」でメッセージボードを制作し、交流学級に掲示することにした(図表 18, 資料編 P11「爪楊枝アートの作成方法」参照)。

爪楊枝アートは作業量が膨大(約 14,000 本)であり、また、決まった場所に決まった色を正確

に刺さなければいけないため、ちぎり絵よりも難易度が高い。そのため、既習内容の発展としてふさわしいと考えた。このことは、特別支援学校学習指導要領総則編第3編第2部第3章第1節-2-(2)-④ 作業学習(ウ)「生徒の実態に応じた段階的な指導ができるものであること」にも合致している。



(図表18：願いを具現化する作業学習)

また、交流学級の担任と連携し、交流学級の生徒には「生徒Aが交流学級への感謝の気持ちから、もっと役立ちたいとの願いを持つようになったこと」や、この活動を通して「生徒Aが交流学級の中で自信をもって活動できるようになってほしいと願っていること」を語った。以上のことをふまえて、完成後には交流学級の生徒から手紙をお礼の手紙を書いてもらった。「とても努力したんだな」や「(生徒Aを含めて)31人で文化発表会ができてよかった」などの、生徒Aを肯定的に評価する言葉を受け取ることができた。

- ・爪楊枝アート、すごい。とても努力したんだなと思った。
- ・体育大会や文化発表会を、30人じゃなく、(生徒Aも含めて)31人全員でやりとげられて本当によかった。

(資料編 P12「交流学級の生徒からのお礼の言葉」参照)

生徒Aも手紙を受け取ったあと、活動の振り返りをした。振り返りでは、「2組の一員になれて良かった」「卒業まで頑張りたい」との言葉があった。他者と積極的に関わる中で、自己有用感を高めたことが分かる。

- ・2組の一員になれて良かった。
- ・卒業式まで、また一緒に頑張りたい。

(資料編 13「生徒Aの振り返り(爪楊枝アート)」参照)

実践別の成果と課題(実践2)

研究内容 1-(3) 取り組みの成果を視覚化するための工夫

- 取り組みの成果を視覚化することで、めあてを意識して積極的に活動に参加するようになった。
- 「100%達成」と自信をもつことができた。
- 行事だけでなく、普段の生活の場面にも実践を広めていく。

研究内容 2-(2) 交流学級の仲間とつなげるためのリーダー会の設定

- 交流学級の生徒から声をかけられたり、認められたりする中で、「自己有用感」や「他者と積極的に関わろうとする態度」が育まれた。
- 「今度は自分が役立ちたい」との願いを持つようになった。
- どうやって役に立っていくか、具体的な方法を

考えていく。→研究内容2－(3)へ

研究内容2-(3) 願いを具現化できる作業学習の設定

- 生徒Aが、交流学級の生徒と積極的に関わる中で自己有用感を高めることができた。
- 卒業式に向け、さらに実践を進めていく。

VI全体の成果と課題

1 願う生徒の姿から

- (1) 仲間と積極的に関わる子
- (2) 関わり合う中で自己有用感を高められる子

研究内容1-(1) (2)

- 生徒の変化に応じて内容を高めていくことで、無理なく活動に取り組むことができた。
- 自分が楽しめる遊びを選ぶことで、「人と関わる喜び」の獲得を期待できる場の設定ができた。
- 言語活動を工夫することで、生徒が気づきを自覚できた。
- これからも気づきを自覚する経験を積めるよう、他の学習でもマッピングを実践する。

研究内容1-(3)

- 取り組みの成果を視覚化することで、めあてを意識して積極的に活動に参加するようになった。
- 行事だけでなく、普段の生活の場面にも実践を広めていく。

研究内容2-(1)

- 年少者からの感謝の手紙を通して、生徒Aが自己有用感を持ち、年長者としての自信を付けた。
- 今後も異年齢集団による交流活動がどのような場で有効であるか、研究を進めていく。

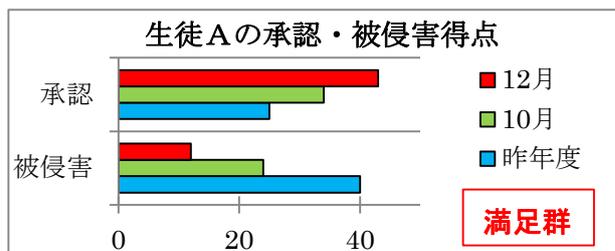
研究内容2-(2) (3)

- 交流学級の生徒から声をかけられたり、認められたりする中で、「自己有用感」や「他者と積極的に関わろうとする態度」が育まれた。
- 「役立ちたい」との願いを具現化することで、生徒Aの自己有用感が高まった。
- 卒業式に向け、交流学級との関わりをさらに深めていく。

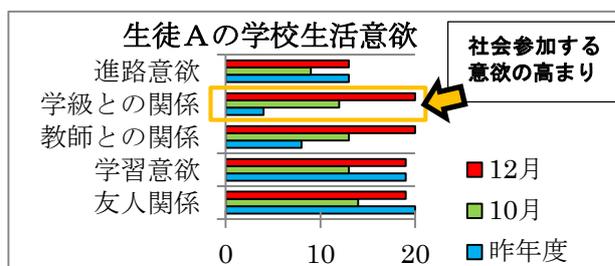
以上の成果と課題より、**研究内容が、願う生徒の姿のために有効であった**と判断できる。

2 生徒の実態から

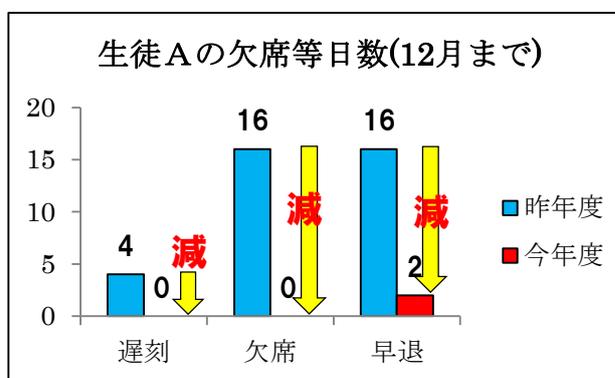
QUの結果は、実践を重ねるにつれ、生徒Aの承認・被侵害感、学校生活意欲、どちらも大きく改善した(図表19,20)。また、生徒Aの今年度の欠席等の日数は、昨年度の12月までと比べて大きく減少した(図表21)。



(図表19：承認・被侵害得点まとめ)



(図表20：学校生活意欲まとめ)



(図表21：欠席日数)

以上の数値面の向上より、**生徒Aの社会性を育むことができた**と判断できる。

VII最後に

今回研究した以外にも、生徒の社会性を高めるにはまだまだあらゆる工夫ができると思っている。

卒業式で、生徒Aが交流学級の仲間とともに笑顔で卒業できるよう、実践を重ねていきたい。